

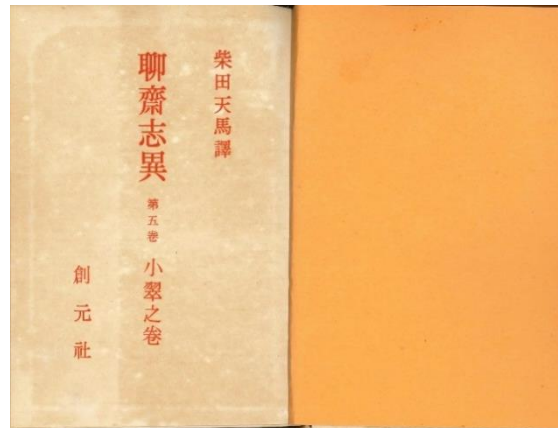
目加田誠先生と中国文学 4

— 『聊齋志異』 4 —

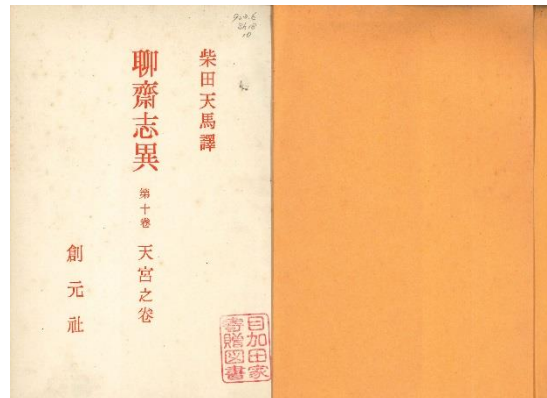
清代の怪異小説『聊齋志異』をご紹介します。目加田誠先生が高校三年生だった時のこと、柴田天馬氏訳の『聊齋志異』がとても気に入って、大学で中国文学（当時は支那文学と言っていた）を選ぶきっかけとなったとも言えるとされているのが取り上げる理由です。

今までに「西湖主」・「八大王」・「画壁」・「嬌娜（きょうだ）」・「勞山道士」をご紹介します。今回は「狐嫁女（こかじょ）」と「王蘭（おうらん）」を取り上げます。柴田天馬氏訳の創元社版では第五巻と第十巻に、岩波文庫版では上巻の第10話と第15話にそれぞれ「狐の嫁入り」・「亡者の金儲け」という副題がついて採録されています。

柴田天馬訳
『聊齋志異』
第五巻とびら
株式会社創元社
昭和26年



柴田天馬訳
『聊齋志異』
第十巻とびら
株式会社創元社
昭和27年



【狐嫁女（こかじょ）】

歴城県（山東省）に住む殷天官は貧乏でしたが、腹の据わった人でした。村の中にはりっぱな旧家がありましたが、住む人も無く荒れていました。ある日、殷が仲間と飲んでいる時に、一人の若者が「あの屋敷に一晩泊まる人がいたら、みんなで一席設けようではないか。」と言い出しました。殷はそんなことはなんでもないと行って、屋敷に入りました。殷は屋敷の中の月見台に上がり横になっていると、階下から誰か上ってくる気配がしました。殷は寝たふりをしていて、上がってきた人は殷を知っていました。そして殷が起きると、「今夜は娘の嫁入りです。同席くださればありがたい。」と言いますので、そうすることにしました。宴席にはりっぱなお碗や黄金の盃が並べられ、大変なごちそうでした。花婿は17・18歳くらいの好男子で、花嫁は絶世の美人でした。狐の嫁入りだったのです。殷はこの屋敷で一晩過ごした証拠とするため、金の盃一個をそっと袖の中にしのばせました。

殷は屋敷から出て金の盃を見せると、貧乏な殷が持っているわけが無いと言って、飲んだ仲間は殷が一晩屋敷で過ごしたことを認めました。

殷はその後出世して進士となり、肥邱県（河北省）に赴任しました。その地には朱という旧家があって、宴会をもよおしてくれました。主人が大盃を持ってくるように命じたところ、召使はなかなか持ってきません。やっと持ってきましたが、主人は、この盃は本来は8個そろいなのですが1個足りませんと言います。殷は、この金杯がかつて自分が持ち出したものと同じのものと気が付いて、私が持っているものと似ているのでさし上げましょうと言って盃を渡しました。

殷は、狐は千里離れた場所からでも物を取り出すことができ、自分だけのものにはしないのだと知りました。

【王蘭（おうらん）】

利津県（りしんけん。山東省）に住んでいた王蘭は突然死にました。しかし、エンマ大王が調べると、係りの鬼がまちがったことがわかりました。そこで本人を現世に送り返したところ、王蘭の体はすでに変わっていました。鬼はエンマ大王に責任をとらされるのを恐れて「近くに住む狐が作った薬を飲めば何事も思い通りになります。」と言って、狐か

ら菓を奪って、王蘭に飲ませました。王蘭が家に帰ると、妻子は変わった姿に驚きますが、王蘭の説明を聞いて納得しました。

そこへ、友人の張が訪ねてきました。王蘭は金もうけができる方法を身につけたからいっしょに旅に出ようと誘います。張は承知し、二人は旅に出ました。王蘭は張に取り付いて他の人からは見えないようにしていきました。

山西省の境で、ある金持ちのかわいがっている娘が眠り込んで起きないので、家人が困っている話を聞きつけ、その家に出かけます。王蘭はその娘から魂がなくなっていることがわかったので、魂を探してきて娘を起こしました。家人は大変喜び、お礼に大金を渡しました。

それから数日して、張の知り合いの賀才が、大金を得た話を聞きつけてやってきました。賀才は仕事をせず、大酒飲みの男でしたが、王蘭はお金をわたしました。賀才は金使いがあらかったので、役人に不審に思われて捕まり、金の出所を白状しました。でも賀才は捕まった時に拷問を受け、それがもとで亡くなりました。賀才の魂は張を頼り、王蘭とも知り合いになりました。3人で飲むと、賀才は騒ぎ、魂まで役人につかまってしまいました。役人が神に報告すると、その夜の夢に金のよろいを付けた人が現われ「王蘭をあゝ世の道を清める係にし、賀才は地獄に落とし、張は無罪」と言いました。このため、張は家に帰りましたが、まだお金がたくさん残っていました。半分を王蘭の家に贈ったので、王蘭の家はうるおいました。

狐嫁女（こかじょ）では、狐と人間が普通に交流していますし、王蘭（おうらん）では、現世の人間と死後の人が交流しています。『聊齋志異』を読んでいると、現実と異界の境がわからなくなるような気がしてきます。本当に不思議な世界です。